

『パウロの祈り②・霊的理解』

'22/03/20

聖書箇所:エペソ人への手紙 1章 17節(新約 p.374)

少し前、私たちは、エペソ 1:3 のみことばに記されてある、『…神はキリストにあって、天にあるすべての霊的祝福をもって私たちに祝福してくださいました。』というみことばを学びました…。どうか、皆さん！このことだけは絶対に忘れないでください！天の神様は、私たちクリスチャンのことを、最高の祝福をもって祝福してくださっているのです！そこで、最も重要になってくるのが、このみことばに、『キリストにあって…』と書かれてあることです！…良いですか？皆さん！実は、ここで教えられてある祝福というものは、皆さんがイエス・キリストのことを信じ…、そのイエス様としっかりと繋がっていないと、受けることはできないのです！

…と同時に、間違いなく、このみことばは、天の神様が私たちクリスチャンたちのことを、素晴らしい…、最高の祝福をもって祝福してくださっている！ということを教えてくれています。…でもね、皆さん、先週のメッセージで紹介した「幸せの青い鳥」の話しを覚えてくださっていますか？…あのストーリーでは、実は、探し回っていた「青い鳥」が自宅に居たという結末だったでしょ？…それと同じように、実は、私たちも、せっかく、神様から素晴らしい祝福を与えられていながら…、そのことに気付いていない、ということが十分あり得るのです…。

命題:パウロが、小アジアにある教会のために祈った内容とは？

そこで、このエペソ書を書いたパウロは、私たちが知っておくべき…、その祝福の内容について、もっとも理解することができるように…、また、あるべきクリスチャンの姿を示そうとして…、小アジアの教会に、パウロが祈った祈りの内容を公開してくれているのです。そのことを前回の復習も含めて、今日は見ていきたいと思えます。

I・救われたクリスチャンに関する 感謝 ! (15-16 節)

15 こういうわけで、私は主イエスに対するあなたがたの信仰と、すべての聖徒に対する愛とを聞いて、

16 あなたがたのために絶えず感謝をささげ、あなたがたのことを覚えて祈っています。

まず、先週学んだことですが…、驚くべきことにパウロは、ローマの地で軟禁状態であったにも関わらず、彼は祈る度ごとに、小アジアで救われたクリスチャンに関する“感謝”というものを、神様に捧げていた！ということを知りました。そのパウロが神様に感謝を捧げていた理由は、エペソを含む小アジアの者たちの救いであり…、そのことの確証をパウロが強く持っていたからでした…。それほどまでに、パウロという人物は、救いに対して、大きな…、いえ、1番の関心を持っていたのです。

例えば、そのパウロは、ローマ 1:16 で、このように告白しています…。『私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。』⇒この当時、福音と言うか…、みことばが教える罪からの救いを語るが故に…、また、イエス・キリストの復活を語るが故に、実に、多くの信仰者たちが迫害を受け、そのために、仕事や財産を無くし、時には、命さえも奪われたような時代に、パウロは救いの大切さ…、偉大さというものを誰よりもよく分かっていたのです！

…と言いますのも、パウロは、よく知っていたからです！「私たち人間は、如何なる行ないによっても救われ得ない！」って…。良いですか？皆さん…。私たち人間は、どれほど清く、正しく、また、神様に喜ばれるように生きようとしたところで、そういった行ないによっては、決して、救われ得ないのです。

だから！神は救いを…、また、救い主であるイエス様を、私たちに与えてくださったのです！そして…、そのイエス様は、私たちが決してなし得なかった罪の清算を…、罪の贖いを成し遂げてくださったのです。本当なら…、私や皆さんが、自分たちの犯した罪や過ちの罰を受けなければならなかったのに、イエス・キリストが身代わりとなって、罪の罰をお受けになってくださった！それが、あの十字架です！そのことを正しく理解していたから…、パウロは私たちに教えてくれたのです、「神をほめたたえなさい！神の栄光を現わすために、生きていきなさい！」って…。と言いますのも、実は、そこにこそ、皆さんを救ってくださった神様の本当の目的が…、また、私たちの生きる目的があったからです！

そういったことを無視して生きていこうとしたところで…、神様以外のところに、本当の祝福はありません。何故なら、本当に救われたクリスチャンとは…、既に、神様に仕えるということを選択したからです。だから、聖書の中には、至る所で、『主』という言葉が使われ…、神様に従うことが当然のように要求されているのです。それは、ごく自然なことです！だって、相手は、私やあなたを造ってくださった真の神様だからです。先週は、そういったことを学んだわけですから…。

II・ますます、神様に関する 霊的理解 が増すように！(17 節)

さて、今日、私たちは、パウロの祈りの2つ目の内容について見ていきます。それは、彼らの“霊的理解”に関することでした。…もう少し言いますと、小アジアの教会メンバーの、神様に関する“理解”がもっと深まっていくことを、パウロは祈り願ったのです。今回のみことばである、エペソ 1:17 には、こう記されてあります。

17 どうか、私たちの主イエス・キリストの神、すなわち栄光の父が、神を知るための知恵と啓示の御霊を、あなたがたに与えてくださいますように。

①聖霊なる神様がなしてくれる 働き とは？

このみことばを観察してみますと、ある方は疑問を持たれるかも知れません。…と言うのは、後半に、『…神を知るための知恵と啓示の御霊を、あなたがたに与えてくださいますように。』とあって、さも、小アジアのクリスチャンたちが、まるで、神様の『御霊』を持っていなかったように思えてしまうからです。

しかし、私たちがもう既に学びましたように、神様は、救われたクリスチャンたちの内に、神の『御霊』、すなわち、聖霊なる神様を与えてくださっています。今回のみことばの直前、エペソ 1:13-14 に、『13 この方においてあなたがたもまた、真理のことば、あなたがたの救いの福音を聞き、またそれを信じたことにより、約束の聖霊をもって証印を押されました。 14 聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証です。…』とある通りです。イエス・キリストにあって完成された、救いの福音を聞いて、それを信じた者には救いが与えられ、そのことの証拠として…、また、保証(=「手付金」の意味)として、聖霊なる神様が、その信じた者の内に居てくださるのです！

実は、ある人たちは、ここ 17 節で言われている、『御霊』には、ギリシヤ語の定冠詞(=英語で言うところの、the)に相当するものが付いていないから、聖霊なる神様以外の…、何か別の霊的なものを指している、というように考えます。確かに、この『御霊』という言葉には、そういったような定冠詞は付いていません。しかし、みことば全体を見て…、この霊という言葉(πνεῦμα)の使われ方というものを観察した時…、そこに定冠詞が付いていようと付いてまいと、前後関係を見ることによって、この言葉が何を指しているかは十分判断できます…。例えば、ここ 17 節で、この『御霊』という言葉の説明する言葉として、『神を知るための知恵と啓示の…』とありますが、私たちがどのようにして、本物の神様を知っていくことができるかという、答えは明確です。神様が…、もっと言えば、聖霊なる神様が、私たちにそういった理解を与えてくださるから、私たちは神様のことを理解できるようになったのです！そうでしょ！

だから、ある時、イエス様は御霊なる神の働きについて、こう教えてくださっています。ヨハネ 16:8-11、
『8 その方(⇒13 節に、真理の御霊と説明されてある)が来ると、罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせます。9 罪についてというのは、彼らがわたしを信じないからです。10 また、義についてとは、わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなるからです。11 さばきについてとは、この世を支配する者がさばかれたからです。』

⇒ここでイエス様が教えてくださっているように、聖霊なる神様が、私たち人間に、『罪について、義について、さばきについて、…誤りを認めさせ(る)』から、人は救われるのです。①『罪について』と言うのは、『彼らがわたしを信じないから』…、つまり、彼らが真の神様を拒んでいること…、真の造り主なる神様のことを真剣に追い求め…、その御方のことを信じようとしないことが、神様の前に責められるべきなのです。でも、聖霊なる神様は、そういったことを私たちに分らせてくださるのです。また、②『義について…』というのは、何が正しいのか？何が真理なのか？イエス様の語られたメッセージが、まさしくそうでした。しかし、当時、多くの人々がそういったことを認めず、信じようとはしませんでした…。しかし、10 節にあるように、イエス様が約束通り、十字架の死から復活され、天へ昇っていかれたことによって、あのイエス様こそが、義であられ、イエス様のメッセージが正しかった！ということが証明されたのです。

しかし、人々は、それだけでは信じません。そこには、やはり、聖霊なる神様のお働きが必要なのです。最後、③『さばきについて…』、ここで言われている、『この世を支配する者』とは、明らかに、サタン(=悪魔)のことです。このサタンは、ひょっとしたら、イエス様が多くの人に迫害され、拒まれ、憎まれて、あの十字架に磔とされて死んだことで、喜んだかも知れません。しかし、イエス様は、敢然と…、その十字架の死からもよみがえられたのです！…何と、イエス様は、サタンの最高の武器である死に対しても、勝利されたのです！そういったような理解…、それを「信仰」と言い換えても良いと思いますが、聖霊なる神様は、そういった理解や信仰を、私やあなたに与えてくださったのです。

ここヨハネ 16 章のみことば以外でも、1 コリント 12:3、『…聖霊によるのでなければ、だれも、「イエスは主です」と言うことはできません。』とある通り、聖霊なる神様が、救われた者に対して働きかけてくださって、そこで、ようやく、私たち人間は、イエス様のことを『主』と呼ぶことができる…。つまり、救われるのです！

ですから、クリスチャンの皆さん…。皆さんは、神様の御働きによって、真の造り主なる神様を知ることができ…、また、神の真理を理解することができたのです。そして、それは、エペソ 1:4 のみことばが教えてくれているように、『世界の基の置かれる前から』の、神様の御計画によるものであったのです。それが、聖書の教えです。だから、救われた後で、私たちクリスチャンは感じてしまうのです…、「どうして、こんなに簡単なことが…、こんなに明白なことが救われる前まで分からなかったのだろう…」って。それは、皆さんに対して、神様が、本当の理解を…、真理というものを悟らせてくださったからです。しかし、聖霊なる神様の御働きはそこで終わりません。実は、今も聖霊なる神は、私たちのことを教え、神の真理を理解させ続けてくださっているのです。

ここ、エペソ 1:17 では、そういったこと…、つまり、聖霊なる神の御働きによって、小アジアのクリスチャンたちが、益々、真の神様のことを、より深く知っていくことができるように！ということ、パウロは祈っているのです。その証拠に、パウロは、少し後のエペソ 3:16 でも、『どうか父が、その栄光の豊かさに従い、御霊により、力をもって、あなたがたの内なる人を強くくださいますように。』と祈っていて…、この聖霊なる神によって、クリスチャンの内側が強められることを…、つまり、内側から成長させられる！ということをおっしゃっています。

ですから、今日のみことばであるエペソ 1:17 で教えられていることは、聖霊を持っていない人たちに、どうか、聖霊を与えてくださいという祈りではなく、今、もう既に与えられている聖霊が、その内でもっと働きをなしてくださいように！ということなのです。クリスチャンの内に居てくださっている…、聖霊なる神様ももっとも、真の神様に対する理解を増し加えてくださるように、というのが、パウロの祈りであり…、願いであったのです。

②聖霊がなしてくれる、私たちの 成長 とは？

皆さん、分かってくださいますか？…パウロの願いは、人々が救われることだけではなく、パウロは、救われたクリスチャンたちが皆、霊的に成長していくことを願ったのです！…でも、今日、この目 ss っせーじを聞いてくださっている人たちの中で、「ああ！私は救われてる！あー、良かった…」ということで、自分が救われたということだけで、満足しておられる方はおられません？…でも、パウロや天の神様は、私たちが救われたということだけで、決して、満足はしなかったのです。…と言うのは、本物の信仰というものは、間違いなく、成長していくからです！…そうでしょ！

じゃあ、ここで少し、皆さんにお尋ねしたいのですが…、私たちクリスチャンの成長って、何を以て判断するのでしょうか？…聖書の知識でしょうか？暗唱している聖句の数でしょうか？教会の出席率でしょうか？奉仕の数や、そういった奉仕の重要度(?)でしょうか？…あるいは、献金などの捧げ物によって判断すべきなのでしょうか？…そういったことが分らないと、私たち…、一体何を以て成長していけば良いのか、非常に、あやふやになってしまいませんか？

ちょっと、皆さん。1 コリント 3:1-3 をご覧ください。『1 さて、兄弟たちよ。私は、あなたがたに向かって、御霊に属する人に対するようには話すことができないで、肉に属する人、キリストにある幼子に対するように話しました。2 私はあなたがたには乳を与えて、堅い食物を与えませんでした。あなたがたには、まだ無理だったからです。実は、今でもまだ無理なのです。3 あなたがたは、まだ肉に属しているからです。あなたがたの間にねたみや争いがあることからすれば、あなたがたは肉に属しているではありませんか。そして、ただの人のように歩んでいるではありませんか。』

⇒ここで、パウロは、当時のコリント教会で起こっていた問題に触れて、クリスチャンの成長ということについて教えてくれています。…でしょ？だから、『キリストにある幼子』なんていう言葉が使われているわけです。じゃあ、ここで考えたいことは、パウロは、何を以てコリント教会が、『キリストにある幼子』、つまり、彼らが、まだまだ未熟であると判断しているか？ということなのです。

実は、前にも言いましたけれども、この当時のコリント教会は、比較的、金銭的には恵まれていたようでした。また、教会のメンバーの多くは、礼拝出席やその奉仕に関して、非常に熱心でした…。動機は、あまり正しいものではありませんでしたが…。また、コリントの教会は、ギリシャ文化の進んだコリントの町であったということを考えてみると、恐らく、聖書の知識も十分持ち合わせていたと思われます。…しかし、パウロは、そのような…、コリント教会全体の状態を知って、こう判断したのです、「あなた方は、まだ、キリストにある幼子(=子ども、幼児)である！」って…。

一体、その根拠はどこにあったのでしょうか？⇒答えは、3 節にありますよね？それは、コリントの教会内に、ねたみや争いがあったからです。それこそが、コリント教会が、まだまだ、霊的には未熟(=未成熟)であるということの、大きな根拠なのです！

つまりね、皆さん…。幾ら、聖書の知識があろうと、あるいは、聖書のみことばを暗唱していても…、また、難しい神学を理解できていたとしても…、あるいは、信仰歴が長かろうと…、あるいはまた、重要な奉仕をたくさんしていたとしても…、また、多額の献金を捧げていたとしても…、その人の生き方が変わっていないければ意味が無いのです！神様は、皆さんの知識や表面的な行ないを御覧になっておられるの

ではありません。神様は、私たちが様々な行為をなす時の動機…、その心の中を御覧になっておられるのです！それでしょ！

どうぞ、ヤコブ 1:22-27 をご覧ください。『22 また、みことばを實行する人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者であってはいけません。23 みことばを聞いても行わない人があるなら、その人は自分の生まれつきの顔を鏡で見る人のようです。24 自分をながめてから立ち去ると、すぐにそれがどのようであったかを忘れてしまいます。25 ところが、完全な律法、すなわち自由の律法を一心に見つめて離れない人は、すぐに忘れる聞き手にはならないで、事を實行する人になります。こういう人は、その行いによって祝福されます。26 自分は宗教に熱心であると思っても、自分の舌にくつわをかけず、自分の心を欺いているなら、そのような人の宗教はむなしいものです。27 父なる神の御前でよく汚れない宗教は、孤児や、やもめたちが困っているときに世話をし、この世から自分をきよく守ることで。』

⇒みことばは、私たちに教えてくれます。もし、私たちの生き方が、主によって変えられているのなら、みことばに従っていくはずだ…。本当に救われている者たちは、教会内だけでなく…、社会にあっても、正しくあろうとするのです！

このみことばや、奉仕に熱心であったコリント教会と、何が違うのでしょうか？⇒要は、“生き方”です。自分のために生きていか、あるいは、神様のために生きていくかの違いです！コリント教会の問題は、多くの者たちが、自分のために教会に行き、自分を少しでも良く見せるために、人よりも尊敬されるような…、目立つ奉仕を重んじる傾向があったのです。だから、分裂や分派…、あるいは、弱い者たちがなおざりにされるなどの問題が起こっていたのです。コリント教会は、みことば…、つまり、神様に従っていたのではなく、自分の欲やプライドの虜に成り下がってしまっていたのです。だから、パウロは、彼らのことを、『肉に属している』とか、『ただの人』（＝救われていない人たちを指していることは明らか）というように、厳しく非難したのです。

今、皆さんに見てもらっているみことばの 23-24 節に、こうあります。『23 みことばを聞いても行わない人があるなら、その人は自分の生まれつきの顔を鏡で見る人のようです。24 自分をながめてから立ち去ると、すぐにそれがどのようであったかを忘れてしまいます。』⇒ここで言われているような…、皆さんは、ご自分のお顔を思い出せますか？⇒…恐らく、簡単に思い出せるはずですよ。もし、そうでなかったら、病院に行くようにしてください(苦笑)。

私たちが、聖書のみことばを読む時、これは 2000 年も前に書かれた書物であるということ意識しないといけない場合があります。特に、ここが良い例です。…現代に生きる私たちは、鏡に何かが映っていても、それがあまりに鮮明に映っているために、本物と見間違ふほどです。しかし、この当時は違います。この当時の鏡は、恐らくは、銅とすずの合金をきれいに磨いたものが主流であったと思いますし、貧しい者は、青銅製の鏡を使っていたと思われる。つまり、ある意味において、他人の顔ほどはつきりと…、鮮明には、自分の顔を見たことが無いような…、そんな時代であったのです。だから、このみことば以外でも、例えば、I コリント 13:12 では、『今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、その時には顔と顔を合わせて見るようになります。…』とあるのです！この当時の鏡は…、特に、一般の民衆たちが使っていたようなものは、『ぼんやり』としか…、不鮮明にしか見えなかったのです。

つまり、先程のヤコブ書で教えられていたことは、みことばを、『ただ聞くだけの者』というのは、みことばに対する理解が足りないのです！しかも、それは、みことばの意味やそこで教えられてある内容というよりも、どちらかと言うと…、みことばを實行することの重要性…、その意義というものがよく理解できていないのです。鏡の例えにあるように、多少、鏡が不鮮明でも、真剣に見ようと思えば、ある程度は見えます。自分自身の顔をよく覚えておこうと強く意識すれば、覚えておくことはできます。つまり、ヤコブ書が教えてく

れていることは、鏡の良し悪しなどではなく…、「要は、その人次第である！」ということを教えてくれているわけなのです。

非常に、聞きにくいのですが…、皆さんは、そういった思いで、メッセージを聴いてくださっていますか？どうしたら自分が成長できるのか？一体何が、自分にとって必要なのだろうか？今日、教えられたみことばを、この1週間、どうやって、自分の身に付けていくことができるだろうか？というようなことを真剣に考えてくださっていますか？…それとも、もう、今日、ご自宅に帰られたら、すっかり聴いた内容を思い出さない…、もし尋ねられても思い出せない、なんてことはないでしょうか？…まるで、ヤコブ 1 章のみことばが教えてくれているような、「ついさっき見たはずの、自分の顔を思い出せない」と、よく似ていませんか？

どうぞ、もう1度、今日のみことばに戻ってみてくださいませ？…ここで、パウロは、教会の中の…、そういった人が少しでも変わっていかれることを期待して、「私は祈っている」と言うのです。良いですか？…パウロが神様への祈りで願ったことは、少し前、「ヤベツの祈り」という信仰書のことを紹介したような…、「どうか、神様！もっと、私のことを祝福してください！」というようなことではなかったのです。あるいはまた、「神様！どうか、あの人たちの信仰をもっと成長させてください！」というようなものでもありませんでした…。それでしょ？

パウロは、神様に関する理解のことを表すために、ここ 17 節で、『“神を知るための”知恵と啓示』という言葉を使っています。ここで言われている、『知恵』(σοφία)とは、単なる表面的な知識のことではなく、その人が持っている知識を活用・実践していくような行動までを含む言葉です。また、『啓示』(ἀποκάλυψις)とは、「現わすこと、覆いを取って真相(秘儀であった内容)を示すこと」というような意味の言葉で、特に、聖書では、神が人に対して、御自身や真実を現わされることなどを言います。ですから、一般の方がよく考えるような…、先のことを言い当てたりするとか、将来に起こることなどの知識のことではありません。神様に関する霊的な理解や、神様の御計画…、そういったことが明らかにされていく！ということなのです。

つまり、パウロは、「どうか、小アジアのクリスチャンたちが、もっともっと！神様のことを深く…、また、正しく知ることができるようにしてあげてください！」ということを祈ったのです。…と言いますのは、真の神様という御方は、もう完全な御方であるからです！この御方が、今以上に、何か少しでも変わる必要も無ければ、変わるはずもありません。

また、この御方は、私たちに必要なすべてのこと…、すべての霊的祝福をもって、私たちのことを祝福してくださっているのです、そういった点においても、今以上のことをなさる必要もありません。…じゃあ、一体何が必要なのか？と言うと、私たちの(霊的な)理解が必要なのです！…だから、パウロは、今日のみことばの 17 節で、『“神を知るための”知恵と啓示の御霊を、あなたがたに与えてくださいますように。』と祈ったのです。

<励ましの言葉>

ひょっとしたら、皆さんは、「もう、私は、神様のことを十分理解できている…。(あるいは)もうこれ以上、神様のことを知らなくてもイイや。」みたいなことを思っておられませんか？もしも、そうなら、それは大変な間違いです！…詩篇 145:3 のみことばが、『【主】は大いなる方。大いに賛美されるべき方。その偉大さを測り知ることができません。』と教えてくれているように、天の神様のことは、私たちが十分に理解できないほど、私たちの理解を超越した御方なのです！

良いですか？皆さん？…先程も言いましたように、現代は、あの「ヤベツの祈り」という信仰書が教えるような…、「神様！もっと、私のことを祝福してください！」そう祈りなさい！というようなことを教え…、また、勧めるような時代です。…しかし、聖書のみことばは、そうは教えません！…私たちクリスチャンは、もう既に、十分満たされている！すべての霊的祝福をもって、祝福されている！と教えるのです。

だから、Ⅱコリント 12 章にも記されてある通り、あのパウロだって、彼は、「自分の肉体のとげが癒されるように！」ということ、3度も主なる神様に祈り願ったわけでしょ！…しかし、そのようなパウロの祈りに対する神様のお答えは、どういったものでした？⇒答えは、NO だったでしょ！みことばには、こうあります。Ⅱコリント 12:9、『しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。』とある通りです。

どうか、今日、このメッセージを聞いてくださっている皆さんも、今以上に、自分が神様から祝福されることを祈り求めるのではなくて、どうか、もっと、この素晴らしい神様のことを知る方に…、あるいは、聖書のみことばが、どんなに素晴らしい約束や生き方を教えてくれているのか？を熱心に学ぶ者であっていただきたいと思います。

そうして、まだ、イエス様のことをお信じになっておられない皆さん。イエス様は、素晴らしい祝福でもって、私たちのことを祝福してくださいます！…もちろん、神様の与えてくださる最高の祝福は、罪とその裁きからの解放でありますけれども、それだけではありません！…神様は、さらなる祝福でもって、私たちの人生を、もっと豊かなものへと変えていってくださるのです！…どうか、この神様のことを、1日も早く信じて、この神様と和解して、この神様と残りの人生を歩む者となっていただきたいと思います。最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。